



## 言語学と経済学の類似点への気づき

著者	住吉 誠
雑誌名	エコノフォーラム
号	26
ページ	71-71
発行年	2020-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028469">http://hdl.handle.net/10236/00028469</a>

2019年  
11月14日  
木曜日

フロリアン・クルマスは『ことばの経済学』という本の中で、言語と経済は接触する点が多いと述べている。たとえば、当時はある国の言語の多様性と経済力に反比例の関係が見てとれたという。

また、この本の中では言語に行われる投資として辞書編集が挙げられている。辞書は、作成にかかわる人の数、年月、費用など他の本に比べて多くの先行投資をしなければならぬ。この世界にあるといわれる6000以上の言語すべてに辞書が存在するわけではない。ある言語の辞書が存在するのはお金をかける（投資する）価値がその言語にあるということであり、その言語の市場価値を示すひとつの指標になるのである。

人間はできるだけ労力を最小限にできるようにコミュニケーションをとる傾向がある。「きしよい」とい

住吉 誠 教授（英語学）

# 言語学と経済学の類似点への気づき

た、若者のことは遣いも「気色悪い」を短縮しできるだけに楽にコミュニケーションをとるといふ経済性（言語経済）で説明できる。学生が使う「キリ教」という科目名の短縮もしかりである。

言語学を経済学と絡めて眺めると、多くの「気づき」に出会う。私は、担当する基礎演習の学生のレポートから別の気づきを得た。レポートでは、何人かの学生が「行動経済学」について紹介した。従来の経済学は、「人間は合理的な存在であり、自分の最大の利益を確実に得るために合理的な判断をする」という「経済人モデル」にもとづいていたという。しかし、実際の経済活動を見ると人間が合理的な判断ばかりをしているわけではない。人間は非合理的にも行動するものである。これらの要素を勘案して経済を見るのが行動経済学ということであつ

た。

翻って言語学では、主に20世紀後半にさかんになった生成文法で「理想化された話し手」というモデルを考える。その「理想化された話し手」は言い間違いをしない。また自分の母語についてすべてのことを知っている合理的な存在とされており、「経済人」と類似のモデルである。20世紀後半の言語学、特に英語学は、この「理想化された話し手」モデルを使って大きな進歩を遂げた。

しかし、「理想化された話し手」は現実の世界にはいない。実際の経済が「経済人モデル」と異なることもあるように、実際の人間は「理想化された話し手」ではない。実際の英語の姿を見ていくと、とても合理的と言えないような表現や思ってもみなかったようなことば遣いで創造性を発揮していることも多い。

そこで、英語学でも、実際の人間

が使用した言語データをもっと観察しなければならぬという主張がされるようになった。近年のコンピュータの発達により一定の基準で収集された大量の言語データ（コーパス）の実例を眺め、英語のしくみ、ひいては言語の仕組みを考える大きな潮流がでてきた。

経済学と英語学では、扱う題材は異なっているが、人間の行動や振る舞いを考えるきわめて人間らしい学問ではないかと思う。知性、感情、意思、このようなものが経済活動にどのような影響をもつか。合理的ではない実際の人間の言語活動がどのようなものかというのを考えるのは大変興味深いものである。究極のところは言語学も経済学も「人間とは何か？」という問いにそれぞれの立場から解答を探しているのである。